

---

# Drive

Lucy

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Drive

### 【Nコード】

N6969F

### 【作者名】

Lucy

### 【あらすじ】

4人の誘拐犯と人質となった予備校生の話。

## 【1】ハジマリの電話（前書き）

ちよつと暗めな話になるかもしれません。なんとか最後まで書きたいと思います。構想は最後まで一応考えてあるのであとは上手く矛盾のないよう書き上げるだけです。読んで頂ければ幸いです。

## 【1】ハジマリの電話

「最後におさらいだ。ターゲットはヨドガワ電機社長淀川源次の息子、淀川吹雪１８歳。予備校生。３人兄弟の末っ子でかなりの甘ちゃんだ。」

「予備校生ってことはそこまで勉強できる奴、キレル奴じゃないってことつすよね？」

「まあな。だが油断は禁物だ。末っ子で甘えん坊ってことはそれだけ溺愛されている、つまり警護がきついということもある。」

「その辺は大丈夫です。ここ２週間張っていましたが、ターゲットに警護はついていません。平日は１０時から１８時まで予備校におります。帰宅後は特に自宅から出る形跡はありませんでした。休日は自宅にいるか友人と遊ぶぐらいで、目立った奇行はありません。」

「友人？ありやどうみても彼女でしょう！」

「まあどちらにせよ、誘拐するにはターゲットが一番最適な人物に違いありません。ロジャー。」

「ご苦労だったな。アーサー。あとは運転の方をよろしく頼んだぞ。」

「ルートは完璧です。ご心配なさらず、任務の遂行を最優先に願います。」

アーサーと呼ばれた男は白い小型トラックに一人乗り込み、バックミラーやらサイドミラーやらをいじくり、ガソリン、バッテリー残量を確認し、ウィンカーをつけては車から降り、ライトの確認を怠らない。雨が降っていないにもかかわらずワイパーを作動させ、正常かどうかを確認する。ブレーキランプを仲間たちに確認させ、彼は小さく頷いた。彼は安全運転を心がける人間であるという理由は多少あるかもしれない。だが、彼らの作戦は天候にも警察にも左

右されてはいけないのだ。その為、万全の体制で挑まなければならない。車の不調で停止したり、ライトが切れて警察に指導された時点で彼らは終了する。

「よし。時間だ。ハリー、ジュード、くれぐれも慎重にな。」

「騒ぎ立てたら自分が口を塞げばOKですよ。あんなひよりの片手で充分ですわ。」

「筋力しか取り柄のないジュード君にはうってつけだな！おいらはとにかく人がこないかを見張りまっせ。」

3人はトラックに乗り込み、ターゲット出現地点へ向かった。

「しかしロジャー。なぜトラックなんすか？ワゴン車にすりゃトラシバなんて使わずにアーサーと連絡取れるじゃないっすか。」

「まあな。ところでハリーよ。アーサーの弱点は何か分かるか？」

「うーむ。人前に立つとキョドるってとこですか？」

「それもあるがな。奴は周囲に人がいるとイラつくというか、集中力を欠く習性があるんだ。とくに後ろに人がいるととにかく落ち着かない。奴には運転に集中させたい。だから緊急のとき以外、奴と連絡を取るのとは避けたい。それにはトラックの方がいいって思っ  
な。」

「ほおー。さすがっすね！」

「神経質な奴は俺には理解できませんわ。」

「アーサーとジュード君は一生分かり合えないな。」

4人を乗せたトラックは閑静な住宅街へと入っていく。この近辺は勝ち組と呼ばれる著名人が多く住み、特にその中でもヨドガワ邸の大きさは異彩を放っていた。この土地に居を構えるだけでも莫大な金がかかるのだが、神社の鳥居かと思紛うほどの門に、森かと思うような木の多さ、その木々の隙間からちよろちよると屋敷の屋根

が見える。これほどの金持ちであれば予備校へ行くにしろ当然高級車での送り迎えがあるはずだと思うかもしれない。しかし、そこは淀川源次の哲学で、若いうちは人並みの生活を送って欲しいという願望があった。彼自身、幼少からここに住んだ結果の答えなのだ。それはヨドガワ電機入社式で毎年語っているので、寝ていない新入社員以外は全員耳にしたことがあるのだ。『貧乏は貧乏なりの、金持ちは金持ちなりの苦悩がある。自分だけがなぜこんな目に？と思うのは間違いだ。皆それ相応の苦悩があり、その苦悩を客観的に見ることでは簡単に変えることができる。視野を広く持て。グローバルな視野を持ち続けてこれたことで、我々は長年日本を代表する企業となりえたのだ・・・』と、ありがたい社長の哲学を1時間も聞けるのだ。

「やっぱりあの言葉は嘘だな。」

「あの言葉ってなんすか？」

「淀川の訓示だ。貧乏は貧乏なりの、金持ちは金持ちなりのって奴だ。」

「元係長とは思えない発言すね。それでどの辺りが嘘と？」

「今はただの犯罪者だがな。あの言葉の全てが嘘だ。貧乏人は金持ちになるには多大な苦勞を強いられる。だが金持ちが貧乏人になるには簡単だ。使っちゃえばいいんだからな。持つ者持たざる者の関係だ。所詮生まれたところが全てなんだよ。淀川源次が何をしてきたんだ？父親の築き上げた遺産をただただ守っているだけだ。優秀なのは奴じゃない。創設者淀川源次と社員達だ。その社員をまずリストラするってのは奴の言うグローバルな視野ってのがまがい物だ。っていう証拠だろ。」

「・・・俺たちのことすか。」

彼らが生きている時代はまさに就職難と呼ばれる時代、いわゆる氷河期である。この時期に首を切られるということは死ねと言うに等しい。大企業ですらこれなのだから、中小企業は目を覆わんばかりの状況だ。ホワイトカラーの戦士達は藁をもすがる思いで会社にしがみつく。そんな価値もない会社がほとんどなのにもかかわらず・・。

ロジャーと呼ばれる男は元ヨドガワ電機の家電部門の係長であった。部下はアーサー、ハリー、ジュードの3人。年齢的にはアーサーが一番上なのだがロジャーは上手く立ち回れる男だったため、アーサーよりも早く昇進した。給料はさほど上がらなかったが、ここで終わる男じゃないという社長のげきなのだらうと解釈し、強引に納得していた。誰よりも会社に尽くし、誰よりも働いたという自負はあった。だが、たった一度の発注ミスで彼は部長に目をつけられた。時期が悪かった。全体的に業績が落ちていた。彼は解雇者リストに名が挙がり、1カ月後首を切られた。自主退社扱いとなったため、退職金は貰えたが、彼は納得がいかなかった。金額ではない。こんなにも会社時間に時間を吸い取られ、ストレスと疲労で何度も倒れかけた末の会社からの答えがこれだったからだ。そしてこんな会社に今まで忠誠を誓っていた自分への馬鹿馬鹿しさに嫌気がさした。結婚を約束していた相手にも見放された。家族からは早く次を見つけてとせかせされた。金を貸してくれる友人なんていやしない。ここ数年会社仲間としかつるんでこなかったツケがここに来た。文字通り、彼は会社に全てを搾取された。果ては会社という物の存在自体に疑問を感じるようになっていた・・。

この世の中に一体どれほどの会社が忠誠を誓うほどの価値を持つのか。

やがて彼はニートになっていった。ひたすらにタバコを吸い、ひたすらに眠り、ひたすらに引きこもった。酒には手を付けなかった。彼の中で酒は会社を連想させるものだからだ。彼はアルコールが強いわけではなかった。だが社会の一員としてちよつとは飲めるようになれとの父親の薦めで飲み始めたにすぎない。家にいれば自主的に飲むことは決していない。彼は酔っ払いの存在にも嫌気がさしてきていた。

やがて彼の思考はとどまることを知らなくなっていく。

会社とは何か、  
社会とは何か、  
幸福とは何か、  
生きるとは何か、  
死とは・・・。

そんな路頭に迷い込んだ時、一本の電話がかかってきた。これが幸か不幸か彼の人生を大きく変えることになった。



## 【2】実行（前書き）

<前回までのあらすじ>

リストラされた4人が会社への復讐として社長の息子を誘拐しようとして計画した。リーダーであるロジャーは会社からあらゆるものを搾取され、その恨みを原動力として会社、そして社会に対して復讐をすることを心に刻んだ。

## 【2】実行

「リストラする前にまずトップが責任を取るべきっすよね。おかげでアリスちゃんに会う機会もめっぼ減っちゃったんっすよ！ひどいっすよね。」

「お前まだあの子に搾取されてたのか。」

「搾取って言い方はないっすよ！アリスちゃんはお金が無いから仕方なくあそこで働いているんすよ。」

「へえー。」

ロジャーとジュードはまーた始まったと言わんばかりの表情でハリーを見た。

「そろそろ足を洗えよ。もう貯金もないんだろ？」

「そっなんすよー。おかげで消費者金融から金を借りないと生活できなくなったんすよ。」

「お前まさか借金してるのか！？」

「はい。50万ほどですから問題ないっすよ。」

こいつの人生は終わったなとロジャーとジュードは目で会話した。

やがて車は路肩に止まった。ヨドガワ邸の屋根がちよろつと見える。彼らはヨドガワ邸の門から約100m離れた場所に停車した。

門前ではあからさますぎるし遠すぎて本人の確認ができなくなってしまうため、適度に距離を置いて停車する必要があった。

「予備校に着く時間が大体9時55分。通学時間が大体12分。普通なら10分からないほどなんだが、ターゲットは必ずコンビニへ立ち寄る。そのため家をでる時間は大体9時43分。現在9時33分。ちよつと早い気がするがイレギュラーを考えると丁度いい。」

「あんまり早すぎても人目について危険ですからね。」

「ロジャー。聞こえますか。ロジャー。」

「聞こえるぞアーサー。どうした？」

「門前に人影が見えます。一人のようです。」

ロジャーはジュードに確認させた。

「本人じゃないです。女のようにです。」

「女？」

「あー門が開きました！」

「ロジャー。これは最悪の展開かもしれません。」

「あー本人が出てきました！あの服間違いありません！見覚えがあります！」

「・・・どうやら、ターゲットの友人のようですね。」

「いやいやだからありや彼女ですって。って言うてる場合じゃないっすね。どうしますか。」

「ロジャー。今日は諦めましょう。これは完全なるイレギュラーです。明日でも実行は可能かと。」

「・・・いや。ダメだ。今日の実行に変更はない。」

「しかし・・・」

彼は恐れていた。しかしその恐れの原因は作戦の失敗ではない。また元の自分に戻ってしまうと感じたからだ。生産性のないニート生活は、仕事人間だった彼を心底攻撃し続けていた。やっと得た救いをここで逃すわけにはいかなかった。彼らの作戦が成功したとしても彼らの未来は真つ暗であろう。だが彼はそれでもいいという信念を持ってこの作戦にあたっていた。あの淀川源次に一泡吹かせることで会社への復讐、そして社会への復讐となるのだと考えていた。それが達成されれば死すら厭わない、牢獄程度なら安いものだ。

「わかった。実行犯は俺が行く。」

「お言葉ですがロジャー。自分の方が腕力に関しては勝っていると思います。」

「ここで腕力を出されたら女に悲鳴を上げられて万事休すだ。腕力は使わない。説得でいく。」

そんなやりとりをしているうちに、ターゲット達は50mまで迫っていた。

「アーサー。すぐ出発できる準備をしておいてくれ。失敗したと思ったら俺を置いて逃げろ。」

そう言ってロジャーは車を降りた。他の3人はロジャーの意気込みに圧倒されると同時に、彼のこれまでの見えない苦勞を垣間見た気がした。

ロジャーは一步二歩と歩き、やがてターゲット達と接触する。

「すみません。」

「？」

ターゲツト達は立ち止まった。

「私、帝都大学病院の松下と申します。」

「はあ。」

「淀川吹雪様でいらつしやいますよね？」

「そうです。」

「お父様の淀川源次様の息子さんでいらつしやいますよね？」

「それが何か？」

「はい。大変申し上げにくいことなのですが実は・・・あ。そちらは妹さんでしょうか？」

「いえ。友人ですが？」

「友人の方でしたか。すみませんがお父様のプライバシーに関わることなので少々外していただけないでしょうか。」

「・・・。ごめん。先にコンビニ行つて。」

友人の女は分かったとだけ言い、先にコンビニへ向かった。

「ご迷惑をお掛けして大変申し訳ございません。」

「父が病院に通っているなんて初耳なんですが？」

「はい。お父様からも誰にも言うなと言われておりました。しかしこれはご家族の方に知らせておかなければならない事態だと、そう思っています。」

「・・・。そんなに悪い病気なんですか？」

「はい・・・。お父様は大変なヘビースモーカーでいらつしやいます。それが影響して肺にガンを・・・。」

「・・・そうなんですか・・・。それは、治らないんですか？」

「発見が遅かったので手術しても既に手遅れの状態です・・・。」

「・・・長くて何年になるんですか。」

「もってあと半年です。それを伝えてもお父様はタバコをお吸いになられるのでそれも厳しいかと・・・。」

「・・・それは、僕のほかに誰かに伝えてますか？」

「いえ。まだあなた様にしかお伝えしておりません。」

「そうですか・・・。」

「それですね。もう少し詳しいお話をさせていただきたいので、当病院まで来ていただけないでしょうか。」

「・・・分かりました。それでは母も一緒に聞いたほうがいいですよね？呼んできます。」

「お父様からお母様には特に内密にするよう言われておりますので・・・本来であればあなた様にも決してお伝えしてはいけないのです。お父様からあなたの話は常々伺っております。ご兄弟の中でも特に可愛がられているあなた様にだけは、私の医師人生をかけてでもお伝えしなければと思ひまして。」

「・・・分かりました。お話は僕一人で伺います。」

「ありがとうございます。あちらに車を待たせておりますので是非ご一緒に。」

「はい。・・・あ、友人がコンビニに待たせたままなのでちょっと電話します。」

ターゲットは友人に簡潔に用件を伝え、電話を切った。

「あの車ですか？なんか野菜を運ぶ車みたいですね。」

「お父様は大変勘のするどい方であられるのは幾度とない問診で既に承知しております。今日も白衣でなくこうして私服でないと、勘付かれる可能性があるのです。」

松下医師はふいに手を上げた。

それと同時に2人の男が車の後ろから出てきた。

予備校生の青年は松下医師に口を塞がれ、  
そして3人がかりで車に強引に乗せられた。

「アーサー！ いけ！」

その声を合図に、白い小型トラックは発進した。

### 【3】革命（前書き）

リストラされた4人が会社への復讐として社長の息子を誘拐しよう  
と計画した。入念に準備された誘拐作戦はいよいよ実行されたのだ  
った・・・。



### 【3】革命

「はい。品川です。」

「もしもし。赤坂です。」

「おお。久しぶりだな。そっちはどうだ？」

「まあ、なんというか・・・それより品川さんはどうなんですか？ 次の就職先はまだ決まっていらないんですか？」

「痛いところつかないでくれよ。なかなか厳しいもんだよ。」

「そうですね・・・」

「立川たちも元気でやってるか？」

「・・・。品川さん。ちょっと聞いてくれますか？」

赤坂の話によると、新しくきた係長が社長のコネでその地位にいたため、全く管理能力がないこと、給料も以前より20%も下げられたこと、休日も格段に減ったこと、特に品川の直属だった立川と大田に対し、あからさまに強くあたるのだという。もう我慢ならなといった表情が電話越しからでも伝わってくる。

「なるほど。そいつは理不尽だな。」

「自分は品川さんの直属というわけではないのでまだましなんです・・・。それでもこれは明らかに不当ですよ。」

「その新係長さんにはその不平は伝えたのか？」

「はい。しかしこちらが何か言うとすぐ用を思い出したからまた後で、と逃げるんですよ。」

「うーむ。」

「それですね。昨日立川と大田が係長を逃さないように囲んで不平を訴えたんです。そしたら係長が突然、

『お前たちは解雇だ!』

って言い出しまして。」

「なんなんだそいつは。お子様すぎるだろう。」

「ええ。そこへタイミング悪く社長が現れましてね。係長の奴あることないこと社長に言ったらしいんですよ。立川と大田について。」

「それでどうなったんだ?」

「立川たちの言い分も聞かずに昨日付けで解雇ですよ。狂ってますよあの社長。」

「そんな馬鹿な!」

「まだ続きがあるんですよ。立川たちへの解雇通告を聞いて自分は納得がいかなかったたのでこれは不当解雇だと社長に訴えたんです。そしたら社長に歯向かうとはいいい度胸だなんていいながら自分にも解雇通告を突きつけてきたんです。自分はもう呆れてしまいました。」

「・・・言葉もないよ。結局は俺が気に入らなかつたってことか。」

「そうみたいです。元からあの係長の下にいた連中は休日も今までどおりで、別段強く当たられることもないようすし。」

「・・・まああの会社のことは忘れよう。所詮はそんな程度の会社だっただけのことさ。」

「・・・品川さん。悔しくないんですか?」

「・・・悔しいけど仕様が無いだろう。次を探そう。」

「自分はこのまま引き下がることなくてできません。何とかしてあの淀川源次に一泡吹かせたいんです。」

「一泡吹かせるって言ったってどうやって？」

「管理部の藤原って奴いるの知ってますよね？」

「ああ。藤原濡って男か。そいつがどうした？」

「あいつ話が分かる奴でしてね。自分たちは不当解雇だって賛同してくれたのそいつだけなんですよ。あとはみんな恐れて何も言えない中ですよ。なかなか熱い奴でしてね。しかも社長の家族とanyaら付き合いがあるらしいんですよ。」

「・・・赤坂。お前何を企んでいる？」

そこで俺は赤坂が淀川源次の息子を誘拐し、奴の慌てふためく顔が見てみたいという、とんでもない告白を聞いた。電話の用件はそれに乗るか乗らないかというものだった。立川と大田は乗ると言っているらしい。俺は最初何を考えているんだという口調で赤坂をなだめたが、俺の中にも一泡吹かせてやりたいという思いがあったのだろう、いつしか赤坂に同調するようになっていった。

今の俺には何か起爆剤が必要だった。この生活から抜け出したいという一心しかなかった。革命家になってクーデタを起こしてやろう、全ての労働者の代表となって抗議してやろう。そんな思いに駆られていた。

『会社を変える、社会を変える。』

というのは凄まじいエネルギーが必要だ。並のサラリーマンでは到底不可能なのだ。

だが今の俺はどうだ？

ニート同然の生活に陥れたおかげでエネルギーは有り余っている！

今の俺にならできるのではないか？

それに俺だけじゃない！

赤坂や立川や大田だっている！

藤原という心強い味方だっている！できる！！

いや、

やるなら・・・今しかない！！！！

そつだ・・・。

ずっと思っていたことじゃないか。

価値のある会社なんて一握りしかないんだ！

それ以外はゴミ同然の企業！

社長だけが私腹を肥やし、社員は低賃金で残業！

それが今の日本の現実！

そんな社会のどこが幸せか！

どこが平和か！

俺が社会を変えてやる！！

革命を起こしてやる！！！！

古き社会をぶち壊し、新たな社会を築くんだ！！！！

俺はかつての係長に戻り、彼らを束ね、作戦会議を重ねた。個人を本名で呼ぶのは危険なのでコードネームで呼ぶこと、事前調査は入念に行うこと、連絡は常に取り合うことなどを取り決めた。

また藤原からは、社長やその家族周辺について色々聞き出した。彼に誘拐作戦に参加するかと問うと、彼は誘拐はよくないといって参加してくれなかったのは残念だが、これだけ情報があれば充分だろう。

俺たち4人がいれば容易にできるはずだ！

万が一失敗したって、これがニュースに流れるだろう……。

そうすれば、どこかの企業のどこかの社員が、きつと同じことをやるに違い……。

捕まっただって無駄じゃない！

これは革命のハジマリなのだから・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6969f/>

---

Drive

2010年12月26日22時58分発行